



(2) 土佐清水市斧積からブラジルへの移住 (明治末・大正・昭和)

日本からブラジルへの移住の歴史は、明治41年(1908)4月28日、農業契約移民158家族782人が笠戸丸にて神戸港からブラジル・サントス港へ入港したことに始まる。

その2年後(明治43年・1910)に第2回の移民があり、全国から集まった247家族906人が旅順丸にてブラジルに向かった。その中に三崎村斧積(現在の土佐清水市斧積)の人々3家族7人が含まれていた。彼らはサントス港から北へ約350キロに位置するグワタパラ耕地にて2年間コーヒー園の契約労働者として働き、その後、サンパウロ近郊で馬鈴薯・トマト・胡瓜・白菜・キャベツなどを栽培し、近郊農業を行った。

移住者たちは、希望を胸に現実と苦闘しながらも、子どもを育てた。二世世代は多くの子どもたちが大学教育を受け、その多くは第2次・第3次産業に従事し、優れた人材を輩出している。ブラジルへ斧積から移住していった先人たちの移住した年・家族数・人数を以下に記す。

- (1)明治43年(1908) 笠戸丸・・・3家族7人
- (2)大正4年(1914) 帝国丸・・・6家族16人
- (3)大正9年(1920) 河内丸・・・15家族59人
- (3)大正15年(1926) モンテビデオ丸・・・1家族2人
- (4)昭和4年(1929) マニラ丸・・・1家族3人
- (5)昭和5年(1930) サントス丸・・・2家族5人
- (6)昭和8年(1933) マニラ丸・・・2家族4人
- (7)昭和9年(1934) アリゾナ丸・・・2家族4人
- (8)昭和30年(1955) アメリカ丸・・・1家族5人
- (9)昭和34年(1959) ブラジル丸・・・1家族2人

この移住者たちの中には、異なる気候の中でマラリアに罹患し、逝去された方々もいる。しかし、斧積からの移住者たちは、移住地を自分たちの楽園とすべく心に希望を灯し、現実と向き合いながら苦闘し、遠い異国の地で自分たちの生きる道を切り拓いていったのである。

【引用・参考文献】斧積郷土誌研究会『斧積郷土誌』土佐清水市斧積, 1995年, 263p.